

○「本当の聞く力」とは何か？

人間が母語を習得するプロセスの入口にあるのは、次の4分野のうち、どれでしょうか？

読む。書く。話す。聞く。

言うまでもなく、「聞く」ですね。

聞くことで言葉を知り、聞くことで意味を知る。

子どもは、そうやって母語を身につけていきます。

私たちの日常の生活場面を考えても、聞くことの重要性は明らかです。

読んでいる時間、書いている時間、話している時間。

そのどれよりも多いのは、聞いている時間でしょう。

直接的な会話だけではありません。

たとえば電車内で耳に入る誰かのおしゃべりや、車内アナウンス。

たとえばテレビから流れてくる、人々の語り。

子どもであれば、授業において先生の話聞くことも大きなウェイトを占めています。

私たちの日常は、聞くことだらけなのです。

精神論は、まねできません。

形がないからです。

しかし、技術はまねできます。

形があるからです。

「聞く力」の「力」とは、技術を使いこなす能力のこと。

まねできる技術を学んでこそ、本当の「力」となる。

これこそ、「本当の聞く力」というタイトルに込められた意味なのです。

○「聞く力」は論理的思考力の一部である

先ほど、「情報の意味を理解する」と書きました。

この「理解」とは、どういうことでしょうか。

それは、簡単に言えば「整理して考える」ことです。

正確には「論理的に思考する」ことです。

要するに、聞く力とは、論理的思考力のことを指しているわけです。

そして、ふくしま式では論理的思考力を「3つの力」に分類しています。次のとおりです。

しかし、「聞く」というのは、とかく受動的な行為です。ぼんやり聞いていると、せっかく耳に届いているはずの情報も、流れて消え去ってしまいます。

では「よーし聞くぞー」と意気込めばよいのかというと、そうでもありません。

ただ意気込んだだけでは、その情報を「理解」することはできません。

この問題集は、そこを意図して作られました。つまり――

- ・自ら能動的に聞き、
- ・情報の意味を理解する。

これを実現するためには、「技術」が必要です。

技術とは、まねできる形式です。

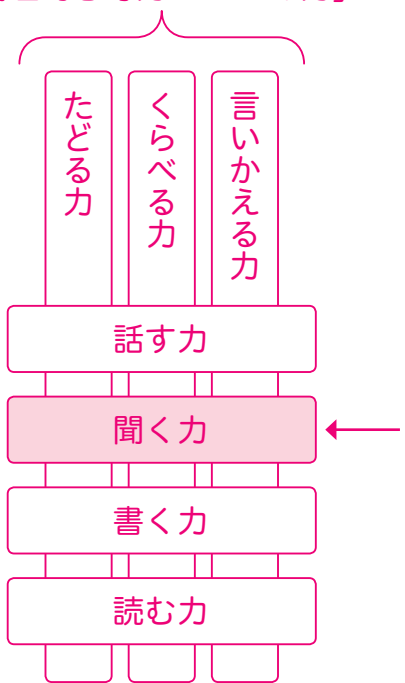
まねできるから、**学ぶ**（＝まねぶ）ことができます。

「聞く力」というタイトルの本は世の中にたくさん出回っていますが、その多くは精神論です。

いわく、目を見てうなずきながら黙って聞くことで相手に共感を示そうとか、相手の話を聞くときは単に相槌を打つのではなく相手の言葉の一部を繰り返しながら聞くことで相手に満足感を与えるようにしようとか。

この問題集は、そういった精神論とは無縁の本です。

論理的思考力＝「3つの力」



この構造に基づいて作られた本書の各パートは、次のようになっています。

- パートI ……言いかえながら聞く（9ページ）
- パートII ……くらべながら聞く（27ページ）
- パートIII ……たどりながら聞く（49ページ）
- パートIV ……まとめの問題（69ページ）

それぞれの概要については、各パートの冒頭のページをチェックしてみてください。